



史の杜

ふみのもり

第1号

上廣歴史資料学研究部門の設立と 「史の杜」創刊

平川 新

上廣歴史資料学研究部門 教授（兼任）
災害科学国際研究所 所長・教授



2012年4月から東北大学東北アジア研究センターに、上廣倫理財団による全面的なご支援のもと、上廣歴史資料学研究部門が設置されました。上廣倫理財団はこれまで、日本では東京大学と京都大学、イギリスではオックスフォード大学に、寄附講座の設置や研究助成をおこない、人文系の学術研究にたいする支援に力を入れてこられました。このたび、東北大学に寄附研究部門を開設していただいたことは、本学にとっても大変栄誉なことです。

上廣歴史資料学研究部門は、歴史資料の保全・調査・研究をメインテーマにしています。歴史資料とは、主に江戸時代までに和紙に墨で書かれた古文書のほか、明治以降に書かれ、歴史資料としての価値をもつ、さまざまな書類・文献等も含めております。日本の各地には、先人たちの歴史を伝えるこうした歴史資料がたくさん残されています。東北大学のあるこの宮城県だけでも、数え切れないほどの歴史資料があります。

在仙の歴史研究者は2003年7月の宮城県北部地震をきっかけとして、宮城歴史資料保全ネットワークを結成し、主に旧仙台藩地域（宮城県と岩手県南）で大切に守られてきた歴史資料を保存し、後世の人々へ伝える活動を展開してきました。この10年余りの成果

は全国の歴史・文化財関係者から多くの注目を集めてきましたが、2011年3月11日の東日本大震災を経験することによって、こうした活動の重要さが、さらに広く認識されるようになりました。

歴史資料の保存活動は、歴史研究に資料保存学の必要性を提起し、地域資料に根ざした新しい歴史研究も生み出しています。それだけではなく、自治体の文化財部局や郷土史研究会の方々との関係を深めていく契機ともなりました。しかし、こうした活動は緒についたばかりです。まだまだ調査・保全・研究を待つておられる地域の皆さんが、たくさんおられます。また、いくつかの地域では本部門主催の古文書講座を開催し、地元の歴史や歴史研究への関心を高めていただく取り組みも開始しました。

私たちの暮らす東北地方は、歴史的にみても幾多の困難を乗り越えながら、現在に至っています。過去の歴史を再発見し、「地域の誇り」を取り戻すためにも、歴史資料学の成果を多方面へと発信しなければならないと思っています。そのひとつの方法として、ここに「史の杜」を発刊することにいたしました。お目通しいただければ幸いです。

寄附研究部門に 期待すること

佐藤 源之

東北大学東北アジア研究センター長



東北アジア研究センターの教員は文理にまたがる多岐の研究分野において、東北アジア地域の研究機関、大学との交流を主軸としながら、多くの研究成果を挙げてきました。こうした研究の中核の一つが「文化財」に関わる課題です。人間活動の表現・具象形態として、有形・無形文化財が形成され、地域研究の重要な研究対象として扱われてきましたが、本センターでは文化財に関する多くの研究活動を行ってきました。東日本大震災では多くの人々が、これまで当たり前だと思っていたこと、いつでもそこにあると思っていた物が、突然消えていく辛い経験をしました。「文化財」の保護の意義はこうして単に歴史の流れの中にあるだけでなく、我々の心にも大きく関わるものであることを実感したのです。

本センターでは東日本大震災以前より、災害科学研究の重要性を認識し、文化財保護活動など、従来の災害研究にとどまらない広範な研究活動を、「災害科学

研究拠点」として、平川新教授が中心となって全学的に展開してきました。そして、この活動は2012年4月、東北大学の附置研究所として発足した災害科学国際研究所へとつながっています。平川教授は新研究所の初代所長として異動されましたが、本センターに新設されたこの「上廣歴史資料学研究部門」の兼務教員として、新たに加わった荒武准教授、高橋助教とともに引き続き資料保全活動を継続する原動力となっただけです。

ここに誕生した新たな寄附研究部門が、「東北アジア、地域研究」という他に見られない研究テーマをもつ本センターに設置されたことの意義は大きいと考えています。身近にある文化財とそれに関わる日常的な研究活動は、東北アジアの視点に立ち、より膨らみのある研究へと発展する可能性を秘める一方、地域研究への実践を含む新しい挑戦を大いに期待しております。

上廣歴史資料学研究部門 への期待

丸山 登

上廣倫理財団事務局長



2011年10月、上廣倫理財団が岡山県津山市で開催した「歴史文化フォーラム」に、平川新教授を講師として招聘したことがそもそものきっかけでした。地域での歴史資料保全に取り組む平川教授の活動を知り、それを支援しようと、東北大学東北アジア研究センターに上廣歴史資料学研究部門を設置し、荒武賢一朗准教授と高橋陽一助教が研究活動を担うこととなりました。

私どもは歴史を通して、先人の生活上の知恵や努力、

勇気を学ぶことは広義の倫理教育であると考えています。歴史上の重要な発見は地道な資料の収集や解析によってもたらされます。広義の倫理教育に繋がる歴史資料の保全活動が広まり、地域に根差した調査活動が行なわれる。その叡智が社会に還元されることは、私どもが期待する教育方法の一つのスタイルです。

2003年7月の宮城県北部地震を契機に始められた歴史資料保全の活動は、東日本大震災を経て、より大きな社会的意義を持つようになりました。研究部門が

その活動のなかで重要な役割を担い、諸先生方やボランティアの方々、そして多くの皆様と共に歩むことと思ひます。地域の皆様方に必要とされ、愛される研究部門となり、東北における歴史資料研究の一翼となることを期待しております。歴史資料学の発展こそ、日

本人が歴史を通して先人の英知を学び続けられる前提条件にほかなりません。この取組みをより大きくすることが出来るよう、引き続き支援して参りたいと考えております。

部門の活動

歴史資料保全活動について

部門では、開設当初から NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク（略称・宮城資料ネット）の活動に協力しています。平成 24 年 5 月から 8 月にかけては、地元の要請を受けて 3 度にわたって宮城県川崎町青根の佐藤仁右衛門家文書の調査を実施しました。

佐藤家の先祖は川崎の領主砂金^{いさご}氏の家臣であったとされ、江戸時代には青根温泉の湯守^{ゆもり}（温泉管理人）をつとめていました。同家は現在も温泉旅館を経営され、館内では風格のある御殿や庭園を目にすることができます。調査では、御殿に保管されている古文書の写真撮影と封筒詰め作業を行いました。確認できた古文書は、慶長 17（1612）年に仙台藩が湯銭（入湯料）の上納を命じた「仙台藩奉行連署状^{ぶぎょうれんしじょう}」をはじめ、温泉の運営や他地域との交流に関わるものなど、近世の前期から近現代に至るまでの幅広い年代にまたがっています。総点数などの文書群の全体像や具体的な内容は、現在進めている古文書の目録作成と解読作業によって明らかにしていく予定です。

また、9 月からは、栗原市の大津家文書の整理作業を行っています。大津家は戦国時代には織田信長に仕えていたとされ、近世には仙台藩主伊達家の重臣で、奉行などの要職を歴任した遠藤家の家臣となりまし

た。同家では、平成 22 年 8 月に宮城資料ネットによって保全活動が実施され、同事務局において搬出された古文書の整理作業が行われることになりました。部門が行っているのは、近世から近現代にかけての古文書 1 点 1 点をその概要を記録しながら封筒に詰めていくという作業で、週に 2 度実施し、平成 25 年も継続する予定です。

このほか、部門では、アメリカのハーバード大学で保管される予定の保全資料（写真版）の概要目録作成も行いました。（高橋陽一）



佐藤家での古文書撮影のようす

地域の皆さんと古文書を学ぶ

上廣歴史資料学研究部門は、「地域と歩む歴史学へ」を大きなテーマにしています。この目標はとてもしっかりしているのですが、私たち部門のスタッフだけが頭のな



岩出山古文書を読む会木曜演習

かで考えていても成り立ちません。「ともに歩いていこう」と応えてくれる仲間が必要です。

私は平成24年4月18日に初めて宮城県大崎市岩出山へ行きました。これが「岩出山古文書を読む会」との記念すべき出会いでした。それから毎月2回(第1・第3木曜)、「東北大学東北アジア研究センター・岩出山古文書を読む会木曜演習」として、約15名の社会人の皆さんと一緒に古文書の勉強をしています。

毎回2時間に及ぶ演習のテキストは、岩出山や大崎市にまつわる江戸時代から明治時代の地域資料です。講師をしている私にも大変読み応えのある古文書ですが、受講生の皆さんも読めない文字に悪戦苦闘しつつ、地名の由来を調べることや、昔から地元に伝わる言い伝えなどを紹介して下さるなど、お互い厳しくも楽しい時間を過ごしています。(荒武賢一朗)

岩出山古文書を読む会の紹介

岩出山古文書を読む会会長 菊地 優子

岩出山古文書を読む会は、「未来クラブ」(伊藤信平会長)という名称の「歴史と古美術」を愛好する会として、昭和52年に発足しました。昭和60年度に「岩出山古文書を読む会」と改称しました。現在は会員数40人を超えて、広い地域から会員が集まる活発な会になりましたが、今に至るまでには会員の高齢化と自然減が続き、活動できない時期もありましたが、会員の増加を図るために紆余曲折のチャレンジを繰り返してきました。昨年度は講座のテキストに地元の古文書を使用し、楽しく学ぶことをモットーに、時にはお茶を飲みながら、和気藹藹とした講座を運営してきました。しかし、「地域の歴史解明に寄与する」の活動方針にはまだまだ程遠い状態でした。

今年度はステップアップを図ろうと初級講座と中級演習に分けることにしましたが、どんな進め方をしたらよいか悩んでいたところに、東北大学から古文書講座に大学の先生を派遣して下さるというおいしいお話をいただき、即乗っかることにしました。初めは、

これまでの楽しい講座に慣れている会員が、大学の先生の、難しい、厳しい講座についていけるだろうか、という心配もあったことは事実でした。実際に荒武先生が通って来て下さるようになり、「講座の前には必ず予習してくること」と前置きされたことで、皆さんは緊張し、必死で予習を始めました。順に指名されて読まなければならないというプレッシャーに今年の暑さも加わって、体調を崩さないだろうか、と心配するほどの真剣さでした。

今では予習は当たり前、中にはグループで調べ学習をしている人たちもいるようです。講座に来るのが楽しかった昨年とは違い、自分の力で読めるという楽しみが見出せたようです。たった半年で、皆さんの顔つきもだいぶ違ってきました。

そろそろ次の目標を、ぐっと高いところに置いてみようかなと思えるようになってきました。ぜひこれからもご指導をよろしくお願いします。

「岩出山史跡めぐり」への参加

岩出山古文書を読む会が主催された「岩出山史跡めぐり」に、部門から荒武賢一朗、高橋陽一の両名が参加しました。読む会の講座は、木曜日と土曜日に開催されているので、この移動研修も平成24年8月30日(木)と9月1日(土)の2回に分けて実施されました。私たちは、約20名の木曜グループとご一緒に、岩出山の名所・旧跡を見学することができました。現在大崎市となっている旧岩出山町は、江戸時代からの館下町(城下町)と近接する村落から構成されています。いわば、都市と農村の関係になりますが、町場、村落の特性をそれぞれ持ち合わせたところが岩出山の特徴で、古くから街道が通り、他の地域との交流も盛んだったようです。

午前中は、下野目地区の松森屋敷からスタートし、江戸時代に流鏝馬の儀礼をされていた高橋家にお邪魔しました。流鏝馬に関する古文書もとても魅力的でし

た。続いて、中町付近へと移動し、当時の中心部であったエリアを見学しました。午後は、いずれも歴史的に興味深い由緒を持つ天王寺、実相寺、祥光寺を訪れました。そして伊達家御霊屋で、岩出山伊達家歴代当主の墓所に参拝しました。

普段は、古文書を読んで江戸時代の地域史を学んでいますが、今回地元で詳しい皆さんとともに史跡めぐりをするので、また新しい知識を得たように思います。

(荒武賢一朗)



岩出山史跡めぐり
(8月30日)

「講座：地域の歴史を学ぶ」について

平成24年12月1日(土)は、わが研究部門にとって記念すべき1日となりました。この日は、初めて主催団体として、大崎市岩出山公民館(スコレハウス)にて、「講座：地域の歴史を学ぶ」を開講いたしました。講座は、普段からご協力をいただいている岩出山古文書を読む会との共催で、大崎市教育委員会にも後援していただきました。

講座は、田口新一氏(岩出山公民館長)、菊地優子氏(岩出山古文書を読む会会長)のご挨拶のあと、堀裕氏(東北大学大学院文学研究科准教授)より「多賀城廃寺を考える」、次いで荒武賢一朗(部門准教授)から「近世大名一門衆の「領政」機構—岩出山「国井家文書」に学ぶ—」の2本立てで行われました。堀氏にはご専門の日本古代史においても注目を集めている8世紀の多賀城に付設された多賀城廃寺を詳しく解説していただきました。古代における寺院建立の意味やその背景にみえる社会情勢などを考える良い機会になったと思います。荒武からは、岩出山古文書を読む会の中級演習で取り上げた「国井家文書」を具体的に

整理しながら、岩出山伊達家の組織や武士の生活ぶりなどを紹介しました。

雪がちらつくような寒い1日でしたが、大崎市内や近隣地域から約70名の方々にご参加をいただきました。2本の講演に関して、多くの意見や質問が寄せられ、討論時間も超過するほどの白熱ぶりでした。今後もこのような講座を開催していきたいと考えています。(荒武賢一朗)



「講座：地域の歴史を学ぶ」の会場風景

「日本語、読めますか？」～学生向け古文書講座の紹介～

平成24年4月より、東北大学にて「古文書を読む会」と題して学生向けの古文書講座を開催しています。毎週木曜日の午後、90分間、仙台藩の地誌「仙台萩」



古文書を読む会のようす

や村落住民の宗旨・戸籍調査の結果をまとめた「切支丹宗門高人数御改帳」を少しずつ読み進めてきました。参加者は東北大、東北学院大、宮城学院女子大の学生が中心で、夏までの前期が10名、秋以降の後期が5名ほどです。社会人学生や留学生も参加しています。江戸時代独特の崩し字や言い回しにも少しずつ慣れてきました。

古文書（崩し字）を解読できるようになるための秘訣は「継続」です。年齢やこれまでの日本史の学習歴は、上達の速度とは関係ないと思います。難解にみえても「日本語」ですから、少しずつでもいいので長く読み続ければ誰でも解読できるようになります。平成25年以降も継続する予定ですので、興味のある方は、先人の記した「日本語」を学びに是非お越しください。（高橋陽一）

古文書はとてもドラマチック

宮城学院女子大学4年 渡邊 信子

「勉強になるからいってらっしゃい」「はーい」とゼミの先生の軽い勧めに、軽く返事して参加したのが「古文書を読む会」でした。前期は、「仙台萩」で、慣れない変体仮名に揺さぶられました。おかげで漢字との区別が推測できるようになりました。後期は「切支丹宗門高人数御改帳」の解読です。前文に「ㇿ」があって読みの検討がつかず困っていると、字典に「ㇿ（ㇿ）」があります。文中には「寺」の字もあるし、苦し紛れにこれを選んで「古文書を読む会」に出席。「ㇿ」と読み上げたら、「ハイハイ」と先生が合いの手を入れたので「読めた」と思ったのです。しかし、おもむろに先生がボードに書いた正解は「ㇿ」。恥ずかしくて顔があげられませんでした。「人別改帳」ってただの戸籍台帳でしょって思っていまし

たが、6年分を追跡する必要があつて調べると、その家の歴史とその家族の人生が見えて、泣けたり安堵したりで、はまってしまいます。

その一例の6年間。嫡女きせは婿を取り14歳で子を産みました。祖母と父は居ません。その後、なぜか母と弟が実家に帰され、婿と子、77歳大黒柱の祖父までも次々と病死、独りぼっちになりました。おなかに前夫の子がいて出産し、すぐ再婚。その婿が家長になりました。どこからか伯父が家に入って、あつという間に4人家族ができてあがりました。

ワクワク・ドキドキしながら、大判の字典にしがみついていると、横から声。「あんだ、お昼は?」「ハイハイ、おっかさん、すぐ用意するね」気分はすっかり近世百姓の娘?です。

「古文書を読む会」感想

東北大学大学院文学研究科博士前期課程1年 早坂 昌英

「古文書を読む会」では、身近で親しみやすい東北の史料を読みました。具体的な授業内容は、予習内容を指名された生徒が読んだうえで先生が解説を行うと

いうものです。解説は、まず先生が全文を板書します。その後、変体仮名や異体字などの現在ではあまり目にしない字について説明をし、最後に頻出の崩し字を説

明します。全文を板書してくださるうえに、変体仮名なども一字一字丁寧に解説をしてくさるので、初心者の方も安心です。また、読み方のコツなども伝授してくさるので、経験者でより力をつけたいと思う人も退屈しない内容になっています。

このため、学部2年生から大学院生までの学年とし

ての幅広さは勿論、留学生・他大学・社会人の方など、様々な人たちが参加しています。私も修士1年の割に古文書が全く読めなかったのですが、この会のおかげで少しずつ読めるようになりました。今後も会に出席して少しずつでも読めるようになりたいと思います。

上廣歴史文化フォーラム開催

平成24年11月25日、仙台市博物館ホールにて上廣歴史文化フォーラム（主催上廣倫理財団・共催仙台市博物館・協力上廣歴史資料学研究部門）が開催されました。本フォーラムは、慶長遣欧使節派遣400年を翌年に控えたプレ企画を兼ね、平川新教授が「スペインの世界征服に立ち向かった豊臣秀吉」と題して講演を行いました。参加は事前の申込制でしたが、定員を上回る聴講希望が寄せられ、会場は満席となりました。

講演内容は、豊臣秀吉の対外政策を16世紀のヨーロッパ列強の動向を踏まえた新たな視点から捉え直すとするものでした。平川教授は、これまであまり使用されてこなかった史料を活用し、スペイン・ポルトガルの世界征服構想が秀吉の対抗心を呼び起こし、東アジア全域（中国・朝鮮・琉球・台湾・フィリピン）の征服構想を生み出したという新解釈を提示し、歴史

的に著名な朝鮮出兵を日本・朝鮮の2国間関係ではなく、世界史的動向の中での海外進出としてグローバルな視点から見直す必要性を強調しました。（高橋陽一）



講演のようす

上廣歴史文化フォーラムに参加して

石巻市 佐々木義明（東北大学文学部科目等履修生）

このほど、上廣歴史文化フォーラム「スペインの世界征服に立ち向かった豊臣秀吉」と題する講演会を聞く機会に恵まれました。

イメージが湧かないタイトルに大きな関心を覚えながらの参加でしたが、講師の平川先生の大変分かりやすい説明にその意味がよく理解できました。

秀吉のパテレン追放令や朝鮮出兵の裏にある秀吉の狙いとするものが、とてつもないこれまで考えも及ばなかった深い意味があることがよく分かりました。時代的背景を的確に捉え、グローバルな視点、それも先

見の目のある、とても秀吉には思えない深い考え方があることに驚きました。さらには、それが徳川時代の「鎖国」に繋がり、ある意味では日本を西欧の植民地化から救い、近代日本へと導かれていったことは大変に意義深いことだと感じました。

私にとっては、目からうろこで秀吉を見直したことはもちろん、日本の歴史を再度切り口を変えて学びなおしてみたいと考えたところです。ありがとうございました。

上廣歴史資料学研究部門 平成 24 年の主な活動

4 月

- 1 日 部門発足
- 9 日 上廣倫理財団・東北アジア研究センター調印式
- 12 日・20 日 仙台市洞林寺資料保全活動（宮城資料ネットへの協力）
- 26 日 学内古文書を読む会を開始（年内継続）

5 月

- 1 日 仙台市洞林寺資料保全活動（宮城資料ネットへの協力）
- 6 日・7 日 川崎町佐藤家資料保全活動（宮城資料ネットへの協力）
- 14 日 村田町山田家資料保全活動（宮城資料ネットへの協力）
- 17 日 岩出山古文書を読む会を開始（年内継続）
- 25 日 東北大学東京分室にて、東北アジア学術交流懇話会・東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門設置記念公開講演会開催
- 30 日 東北学院大学文学部で出張講話

6 月

- 13 日・14 日 川崎町佐藤家資料保全活動

8 月

- 7 日・8 日 川崎町佐藤家資料保全活動
- 27 日 村田町山田家資料保全活動

9 月

- 4 日 岩手県一関市金家資料保全活動（宮城資料ネットへの協力）
- 10 日 東北大学川北合同研究棟改修工事にもない、部門研究室を経済学研究科棟 509 号室に一時移転
- 25 日 栗原市大津家文書整理を開始（年内継続）

10 月

- 2 日 部門ホームページ開設
- 14 日 栗原市で資料保全活動（宮城資料ネットへの協力）
- 16 日・17 日 大崎市鬼首地区で資料調査

11 月

- 16 日 岩手県一関市金家資料保全活動
- 24 日 岩沼市民健幸大学（市民向け講座）で講義
- 25 日 仙台市博物館にて、上廣歴史文化フォーラム開催
- 28 日 東北学院大学文学部で出張講話

12 月

- 1 日 大崎市岩出山公民館にて講演会「講座：地域の歴史を学ぶ」を開催
- 15 日 岩沼市民健幸大学で講義



史の杜 第 1 号



発行

平成 25 (2013) 年 1 月 31 日

編集・発行

東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門

スタッフ

教授：平川新 准教授：荒武賢一朗 助教：高橋陽一

所在地

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

電話・ファックス

022-795-3196

URL

<http://uchiro-tohoku.net/>